

らぬい
くま

不知火海・球磨川流域圏学会

NEWS LETTER

令和5年度研究発表会報告

令和5年度第1回現地見学会記録

八代市の歴史を辿る宮地・古麓の寺社巡り

令和5年度総会報告

会計報告

新会員紹介 ジェフリー・モロー

イグサ栽培を終え次へ

令和6年度大会のご案内

つる詳子

時松雅史

つる詳子

坂井米夫

坂井米夫



33

2024年3月30日発行

八代・子安観音観

令和5年度研究発表会報告

つる詳子

本年度の研究発表会は、基調講演を八代市博物館未来の森ミュージアムの島津亮二氏。研究発表会は会員を含む7名の方による研究報告がありました。

島津氏の「八代市の妙見信仰について」は、いろいろな資料・文献からは見えてこない妙見信仰のお話が聞けて大変興味深かったです。他の方の報告を含め、FBページ「不知火海・球磨川流域圏学会」において、公開していますので、そちらをご参照ください。

【日時】令和5年6月3日(土) 13:00～17:00

※ポスター発表 12:00

【会場】熊本高等専門学校八代キャンパス（八代市平山新町2627）

■基調講演

「八代の妙見信仰について」

島津亮二（八代市立博物館未来の森ミュージアム・学芸係主幹）



〈内容〉八代地域の代表的名所の一つに八代神社（八代市宮地町）がある。江戸時代は妙見宮と称し、今なお人々は親しみを込めて「妙見さん」と呼んでいる。その歴史は相良氏が八代を統治した戦国期にまで遡るが、八代の地で妙見信仰が定着、発展してきたのか、実はまだ不明な点が多い。

博物館が積み重ねてきた調査研究成果は展覧会図録『妙見信仰と八代』（八代市立博物館編、2021年）を

ふまえて、八代の妙見信仰の歴史的経緯と性格についての報告。

■研究発表（口頭発表）

①古麓城下の寺院と仏像

石原 浩（八代市立博物館 未来の森ミュージアム・学芸員）

〈内容〉古麓城は、南北朝時代以来八代を治めた名和氏、続く相良氏が拠点とした山城で、島津氏が八代に入る天正10年（1582）までの約230年間、八代支配の拠点であった。妙見門前町に続く古麓城下の町並みは、八代を訪れたルイス・フロイスが感嘆するほどの賑わいを見せた。その古麓城下の寺院とゆかりの仏像について紹介。

②「球磨川河口域のシギ・チドリの生息状況」

高野 茂樹（八代野鳥愛好会・会長）



〈内容〉八代海の球磨川河口周辺には約1500haの砂泥質の河口干潟が形成され、干潮時には多数のシギ・チドリ類が飛来する。シギ・チドリ類の球磨川河口干潟利用の特徴を明らかにするために、群集成の時期（春と秋の渡り期および越冬期）や微地形（干潟の位置）による動向を調べ、シギ・チドリ類個体群が球磨川河口をどう利用しているか調査を行った結果の報告。

③「活断層帯との共生について ―熊本地震を益城で経験して―」

福田 泰英（三和地質コンサルタント・会長）



〈内容〉熊本地震（2016年4月14,16日）から7年が経過した。当時の激震におびえた記憶も少しずつ薄れつつあるが、当時の地震に対する備えはどうか、どうすべきであったについての振り返り報告。

④「県南に拡がる外来生物アライグマ」

歌岡 宏信（NPO法人くまもと未来ネット・理事）



〈内容〉日本では1962年愛知県で初めて生息が確認され熊本県においては、これまで県北市町村での確認が多かったが、確認情報が徐々に拡大しつつあり、県南の芦北町や水俣市でも確認されるようになってきた。そのアライグマの生態紹介と熊本県における生息状況の推移と今後予測される生息数急増、今後必要となるアライグマ防除対策についての報告。

⑤「住民主体による復興まちづくりのプロセスに関する研究」

竹崎有麻（熊本県立大学大学院・環境共生学専攻・博士前期課程1年）

柴田 祐（熊本県立大学環境共生学部・教授）



〈内容〉西日本豪雨で甚大な被害を受けた愛媛県西予市野村町野村地区を調査対象とし、復興計画の検討プロセスにおいて、住民がどのように関与しているのかを明らかにすることで、住民主体による復興

まちづくりのプロセスやそのために必要な人材を明らかにすることを目的とした調査報告。

⑥「緑の流域治水研究の進展状況」

島谷 幸宏（熊本県立大学・共通教育センター・特別教授）



〈内容〉2021年11月よりJSTのCOI-NEXTの地域共創拠点「流域治水を核とした復興を起点とする持続社会」の研究が始まり、1年8か月が過ぎた。最初の1年半は研究の構想を固め、基盤を整える時期に当たるが、おおむね当初の目的達成。その後の本格的な取

り組みの進展状況の報告。

⑦「令和2年7月豪雨発生、球磨川下流域の瀬戸石ダムおよびその周辺域でどのようなことが起こったのかを振り返る」

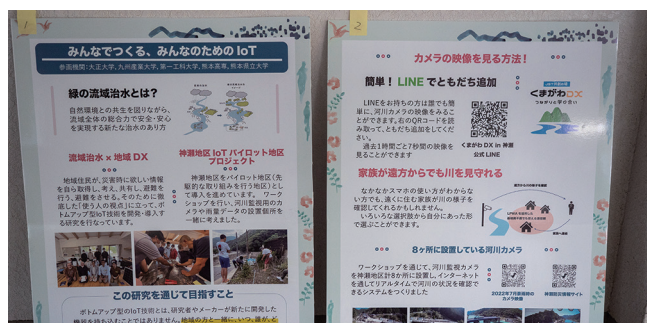
堤 裕昭（熊本県立大学・学長兼特任教授）



〈内容〉令和2年の熊本豪雨発生時においては、球磨川の発電専用瀬戸石ダムからの放流により下流の河川流量が大きく変動し、ダム堤体が川の流れの妨げにもなることで、その危険性を危惧する声は

少なくなかった。豪雨発生時、瀬戸石ダムおよびその周辺域でどのようなことが起きたのか。気象や河川の観測データ、国土交通省委員会資料、同ダムの発電事業者の発表資料、当時の写真、筆者の実体験、住民からの聞き取り、現場調査などをもとに、その実情を検証。

■ 12:00 ポスター発表



①「ボトムアップ型IoT」

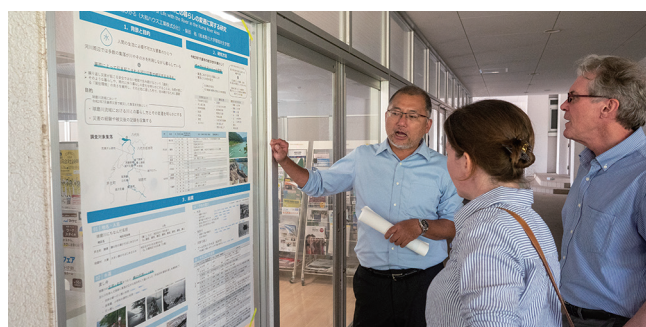
熊本県立大学 流域治水を核とした復興を起点とする

持続社会地域共創拠点

〈内容〉熊本県立大学が中心となっていて行っている「流域治水を核とした復興を起点とする持続社会地域共創拠点」において、「デジタル技術を活用した『緑の流域治水』のスマート化と地域DXの実現」を研究開発課題の3として設定し、その中でIoTを用いたボトムアップ型避難・防災情報システム開発を行い、球磨村神瀬地区を対象に地域の方々とワークショップを行い、IoTカメラの設置、その情報のLineでの配信などを実施。その現状と課題を報告。

②「球磨川流域における川との暮らしの変遷に関する研究」

新羽ひかる（大和ハウス工業株式会社）



柴田 祐（熊本県立大学環境共生学部・教授）

〈内容〉令和2年7月豪雨では、各地で大きな被害を出したが、球磨川流域においては、過去何度も大雨による被害がありながら、被災と復旧を繰り返しながら川とともに生活してきている。令和2年7月豪雨災害で被災した集落を対象として、ヒアリング調査によるオーラル・ヒストリーの収集を行い、球磨川流域における川との暮らし方とその変遷に関する調査報告。

で来る所ではないと思った。我々の他に福岡ナンバーの車で来ている人がいた。男女2人連れだったが、33年も八代に住んでいる私でさえ初めて来たのに、よくもここを探して訪問したものだった。



④次に、ほとるの里公園に隣接する懷良親王御陵を見学した。懷良親王とは後醍醐天皇の十六皇子で、南

朝の征西将軍として派遣された人物である。永和元(1375)年征西将軍職を良成親王に譲り、筑後矢部に隠退、弘和3(1383)年、この地でなくなったとされている。親王の墓は各地に伝説があったが、明治11(1873)年の宮内省の調査でこの墓地を親王の墓とした。これにより八代城本丸跡に親王を祀る八代宮が創立された。当日は、宮内庁書陵部桃山陵監区懷良親王墓の守部を務める松岡長紀氏から説明があった。松岡氏は会社退職後、家系が親王とゆかりがあるということで、守部として宮内庁から委託されているとのことである。松岡氏からは、ここは宮内庁の所領で2000坪あるが、墓陵の規模としては小さい、階段から上は皇族や宮内庁関係者以外は立ち入り禁止、写真もNGである、墓は宮内庁による管理以後、発掘調査は行われていない、昭和15(1940)年の労働奉仕で墓を囲む石垣をつくった、という話があった。

⑤次に、懷良親王の菩提寺で曹洞宗永平寺の末寺となる悟真寺を訪問した。ここは親王陵から急な坂道を登ったところにある。八代市博物館の石原浩氏の資料(研究発表会)によると、「創建には諸説あるが、一説



に元中7年=明徳元(1390)年、征西将軍懷良親王の菩提を弔うため良成親王の命により菊池武朝が創建、寺名は懷良親王の法号「悟真大禅定門」からつけられた」とある。大正10(1921)年に建てられた靈殿には、懷良親王の位牌や肖像画が伝えられている。建物の案内板には、「靈殿の設計は近代の代表的建築家で建築史研究の第一人者・伊東忠太である。神社木造論を主張し明治神宮を設計した同時期の作品といわれている」と記されていた。靈殿の中で、松岡氏から、宮内庁職員とのやりとりについてユーモラスを交えながら話をしていただいた。



⑥次は、車で移動し、古麓稻荷神社の奥にある展望台で昼食をとった。この展望台は球磨川を眼下に八代市中心部がずっと見渡せる絶好の場所である。10年以上前までは木が生い茂り、うっそうとして余り見渡せる状況ではなかったが、現在は地元の有志が頑張っている。また八代工業高校の生徒が作ったと記したテーブル・椅子が並べられていた。弁当は坂本のつるの屋旅館に依頼した。メニューは、蕨の炊き込み飯、焼きなすともろみあえ・ブロッコリとあさりあえ・ほうれん草ごまあえ・煮卵・一勝地鱒のムニエル・エビマヨほかである。どれも美味しくて当旅館に注文してよかった。



⑦昼食後は、稲荷神社の下にある春光寺を見学した。当寺は八代城主松井家の菩提所で臨

済宗南禅寺派の末寺である。藩主細川綱利が松井家の菩提所として春光寺を創建させ、延宝 5(1677) 年に落成した。寺号は、松井康之の法号「春光院英雲宗傑」にちなんだものという。この日はちょうどアジサイが満開でとてもきれいだった。前述の石原氏が、なぜ城下に菩提寺をつくらず宮地につくったのかという問いに、宮地には妙見宮があり、八代の聖地であることが理由の一つではないかと話をしていたが私も同意見である。



⑧最後に、八代神社を訪問した。かつては妙見宮という名前であったが、明治の廃仏毀釈が行われたときに、

「妙見」という仏教用語が使用困難になり、八代神社に改めたという。昨日の八代市博物館学芸係主幹鳥津亮二氏による基調講演「八代の妙見信仰について」を聞いて神社の歴史をより深めることができた。ここでは若い宮司さんから、熊本地震による被害の話とお田植え祭りの話があった。お田植え祭りは、年が明けた 1 月 3 日に開催される、かつては朝 4 時から開催されていたが、現在は 7 時からとなっている、田植えの所作をしたり、巨大な杵を準備して、参加者が競ってその杵の一部を持ち帰り自分の田に供え豊作を祈念するというものらしい。日本一早いお田植え祭りなの

で、寒い時期ではあるが参加してほしいと明るい口調で話があった。ほかに本殿には波ウサギの彫刻もあり、妙見信仰は航海の安全を守るという面もあるので、造られたのではないかと説明があった。



⑨ここで、今回の訪問先は終わりとなるが、まだ体力が残っている人は八代神社の裏手にある雲符神社まで

足を伸ばした。100 段余りの階段を登ると、小さな社がある。江戸時代、この神社が発行する霊符が人気があり、遠くからも手に入れようとする人がいたらしい。御神体は霊符を刷るときの版木で、今も八代のパワースポットになっているそうであるが、あまり多くの人に知られていないのが残念である。

参加者は再び朝集合したほたるの里公園に戻った。水無川では親子連れや中学生が集まり遊んでいて、市民の憩いの場になっていた。ここで一同は散会、それぞれ帰路についた。今回の見学会は地元八代での開催であったにもかかわらず、知らないことが多くとても反省させられた。これを機にもっと地元のことを知ろうと思う。最後に、各見学会場で説明していただいた松岡氏や八代神社宮司にお礼申し上げます。

令和5年度総会報告

令和5年度の総会は、八代市の熊本高等学校八代キャンパスにおいての開催となりました。広いキャンパスの会場や設備が利用できるのは、とてもありがたく感謝しています。また、遠くからご参加いただいた会員の皆様もありがとうございました。準備に携わった役員の皆様お疲れさまでした。

会場：熊本高等専門学校八代キャンパス 1 階合同講義室

5) 諸連絡



山江村役場駐車場→丸岡公園→合戦嶺観音→歴史資料館→山田大王神社→山江温泉ほたる亭（昼食）→御溝川取水堤→淡島集落（被災地）→吐合集落（被災地）→ ①役場駐車場（解散）

3) 第2回現地見学会

日時：令和4年10月16日（日）

場所：鹿児島県 長島町獅子島 参加者：12名

コース：諸浦港→片側港→旧幣串港幼稚園跡→獅子島化石パーク→鉾崎展望台
民宿白浜荘（昼食）→黒崎空中展望所→片側港→諸浦港

4) ニュースレター発行 年2回

第31号：令和4年9月10日、第32号：令和5年4月23日

5) 学会誌発行 Vol.16号 12月30日発行

6) 理事会開催（7回）

第1回	令和4年8月19日	（8名）	八代市太田郷コミュニティセンター
第2回	令和4年11月3日	（11名）	八代市太田郷コミュニティセンター
第3回	令和4年12月16日	（8名）	八代市坂井米夫宅
第4回	令和5年2月17日	（8名）	八代市太田郷コミュニティセンター
第5回	令和5年3月17日	（7名）	八代市太田郷コミュニティセンター
第6回	令和5年5月12日	（10名）	八代市太田郷コミュニティセンター
第7回	令和5年5月25日	（10名）	八代市太田郷コミュニティセンター



不知火海・球磨川流域圏学会令和5・6年度役員

<理事>

会 長	堤 裕昭	熊本県立大学・学長兼特任教授
副 会長	森山 聡之	福岡工業大学社会環境学部・教授
副 会長	時松 雅史	熊本高等専門学校八代キャンパス・教授
事務局長	つる 詳子	自然観察指導員熊本県連絡会・会長
会 計	坂井 米夫	環境保全型農業研究会

学会誌編集委員長	堤裕昭	熊本県立大学・学長兼特任教授
編集委員	新井 祥穂	東京農工大学大学院共生科学技術研究院・准教授
〃	入江 博樹	熊本高等専門学校熊本キャンパス・教授
〃	上村 雄一	くまがわ春秋・編集主幹査読委員
〃	蔵治光一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科・教授
〃	Jeffrey Morrow	熊本県立大学共通教育センター・教授
〃	高木 正博	宮崎大学農学部・教授
〃	高橋 徹	熊本県立大学・非常勤講師
〃	森山 聡之	福岡工業大学社会環境学部・教授

総務委員長	つる 詳子	自然観察指導員熊本県連絡会・会長
総務副委員長	高平 雅由	水俣病資料館職員
総 務	大塚 勝海	自営業
〃	小川 滋	九州大学名誉教授
〃	亀井真由美	八代市林務水産課・係長
〃	久保田貴紀	かちゃあデザイン一級建築士事務所
〃	佐藤美智恵	主婦
〃	正角 雅代	天草海部・教諭
〃	高野 茂樹	八代野鳥愛好会・会長
〃	松本 学	人吉中央出版社

<監事>

監 事	沢畑 亨	水俣愛林館・館長
監 事	歌岡 宏信	NPO 未来ネット・理事

<顧問>

顧 問	大和田紘一	東京大学名誉教授
-----	-------	----------

会計報告

坂井米夫

4 年度予算			
(収入の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3 0 0 0 円 * 85 名	255,000	
団体会費		0	
繰越金		249,943	預金 245888 円口座 4055 円
雑収入	学会誌・PDF 販売等	10,000	
	余剰金 寄付金	30,000	見学会残金・はがき等
計		544,943	
(支出の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
発送料	90 名	65,000	発送 3 回 + ハガキ
学会誌作成費	印刷	100,000	
ニューズレター作成	2 回 / 年	50,000	
事務経費		50,000	コピー、チラシ等
H P 維持費		20,000	ドメイン・維持費
会議費	会場費	30,000	総会・役員会・ズーム代
雑費	講師謝礼	10,000	
		0	
予備費		219,943	次年度に繰越
計		544,943	
4 年度決算			
(収入の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
個人会費	3 0 0 0 円 * 4 6 名	138,000	
団体会費		0	
繰越金		249,943	預金 245888 円口座 4055 円
雑収入	学会誌・PDF 販売等	18,000	
	学会誌残金	47,860	
	発表会会費	63,000	
	寄付	24,738	見学会残金、利息 2 円
計		541,541	
(支出の部)			
名 目	内 容	金 額	備 考
発送料	8 0 名	43,306	発送 3 回 + ハガキ
学会誌作成費	印刷	0	本年度執行せず
ニューズレター作成	2 回 / 年	42,710	
事務経費	チラシ封筒等	62,898	コンフリート 3, 9 万含む
H P 維持費	2 カ年分	21,120	ドメイン・維持費
会議費	会場費	33,930	役員会、総会会場 30610
雑費	講師謝礼	10,000	
	手数料	2,310	
繰越	j 次年度に繰越	325,267	預金 249022 振込口座 76245
計		541,541	

監査 沢畑亨

新会員紹介

ジェフリー・モロー

Jeffrey Morrow Introduction

熊本県立大学・共通教育センター・教授



フルネームはジェフリー・スチュワート・モローと言います。現在、熊本県立大学の共通教育センターで英語を教えています。皆さんはジェフというニックネームで呼んでいます。環境共生学部の環境共生科学科環境資源学専攻で4年生の卒業研究を指導していますが、近いうちに大学院生も指導したいと思っています。

アメリカのワシントンD.C.にあるアメリカン大学で修士号を、2015年に熊本学園大学で経済学博士号を取得し、この大学院の課程で観光業における英語力の重要性についての研究に着手しました。その間に、カンボジアのシェムリアップ（カンボジア北西部のリゾート地、9～15世紀に栄えたクメール王国の遺跡であるアンコール遺跡を訪れる際の拠点）を訪れて、観光業とエコツーリズム、観光業の発展における英語の役割について研究し、いくつかの国際会議にも参加しました。ミャンマーとネパールでも同様な研究を行うとともに、観光業における英語と観光業の発展に関する研究成果を取りまとめていくつかの論文を執筆しました。また、英語の文章を書くことや、英語を専攻していない学生へ環境に関するトピックを教えること、課題をこなすこと通して英語を学習することについて、研究論文を執筆してきました。

私の最近の研究テーマは、農村におけるエコツーリズムの開発です。このような試みは、農村地域が現在直面している問題を支援できると私は信じています。その問題とは、過疎化、高齢化、そして環境の劣化と地球温暖化の問題です。現在は、学生たちと人吉球磨地域の環境学習を兼ねたエコツーリズムの開発について研究しています。また、人吉・球磨地方の仕事や生活において、英語力がどのような役割を果たすのかについても関心を持っています。

My full name is Jeffrey Stewart Morrow, and I am an English teacher in the Center for General Education at the Prefectural University of Kumamoto. Many people call me by my nickname, with is Jeff. I also supervise fourth-year students in the Department of Environmental & Symbiotic Sciences, Division of Environmental Resources, and I hope to supervise graduate students someday as well.

I received my Masters Degree at American University in Washington, D.C., and my PhD in Economics at Kumamoto Gakuen University in 2015, where I began researching the importance of English ability in tourism. While there I visited Siem Reap in Cambodia to research tourism and ecotourism, and the role of English in tourism development, and also participated in several international conferences. I also researched in Myanmar and Nepal. I wrote several papers on English in tourism and tourism development in general. I have also written research papers on English writing, teaching environmental topics to non-English majors, and learning English through completing tasks.

My newest research interest is rural ecotourism development. It is my belief that an endeavor such as this can assist rural areas with problems they are facing at the moment. These problems are depopulation, an aging population, and the problems of environmental degradation and global warming. Right now I am researching ecotourism development with environmental learning in Hitoyoshi-Kuma Region area with my students, and I am very interested in determining what kinds of eco-related activities will help the area thrive in the future. I am also interesting in discovering what role English ability has in jobs and livelihoods in Hitoyoshi-Kuma Region.



イグサ栽培を終え次へ

イグサ米農家 坂井米夫

1970 年から農業を始め米とイグサ栽培をしてきたのですが、イグサ栽培を 2021 年収穫を最後に 2023 年春までに加工を終えてイグサの仕事から離れる事になりました。イグサは 1970 年全国で 9600ha 熊本県 4630ha 栽培され、見渡す限りイグサで埋め尽くされて青いダイヤと呼ばれた時期もありましたが直近の栽培面積は全国 300ha 余り（熊本 100% 近い）となり消滅の危機にあります。

イグサは生産者が栽培と畳表加工し、それを市場で販売します。買った生産地の問屋さんが消費地の問屋さんを通して畳屋さんに販売します。一般的には生産者はイグサを栽培しそれを 1 年かけて畳表に加工して市場で販売するのですが、市場に出さず問屋さんと契約して販売する人や、畳屋さんと契約して販売する人、ごく一部の畳屋の仕事までする人もいます。私はイグサ栽培始めて 10 年余りで問屋さんと契約して販売していました。その頃需要の低迷と中国産の大量輸入で畳表価格が暴落して自殺者が大量に出て全国放送で特集された時期がありました。市場での価格は相場変動が激しくなりますので、年間変動の無い価格で契約して安定した収入をと問屋さんに販売していましたが、消費地の畳のシンポジウムに参加した時、偶然買ってもらっていた畳屋さんに会い「こちらが欲しい時に問屋に在庫が無い」と言われました。生産者はイグサ植え付け時期と刈り取り時期以外は年間を通して平均して生産しているのですが、問屋さんが生産者の畳表を固定した畳屋さんなく、欲しい畳屋に販売するので需要期には不足して、端境期には余ってしまいます。畳屋さんも同じ表が手に入らず品質も価格も違ってきて困ります。

2001 年ころ県のブランド化で粒の小さくて表皮が固い「ひのみどり」という品種が奨励品種になりました。イグサ栽培をはじめた頃から問屋さんに販売する生産者と研究会を作って活動していましたが、イグサ

研究所 OB の人たちと定期的に会ったり懇親会をしたりする中で「ひのみどり」は失敗品種で、綺麗なイグサだが伸びが悪く粒が小さいので手間がかかるのが欠点で今まで品種登録していなかったとの事でした。ひのみどりの生育や畳表の加工状況を見て「ひのみどり」の栽培より、これまでの品種の方が手間がかからず安定した製品と価格が望めると判断し 10 年あまり付き合った産地の問屋との契約を打ち切り消費地に交流のあった畳屋さんと直接契約することになりました。

畳屋さんとの契約は製品が一定していれば価格は下がることはなく数年ごとに価格の改訂を行い今まで価格が下る事はありませんでした。畳屋さんにとってもメリットは、同じ製品なのでカタログが出来る。仕入れ価格が一定なので販売価格が一定する。注文から 1 週間もあれば着くので多くの在庫を必要としない。製品に問題があった時は直接連絡出来て解決が早い。

熊本県の「ひのみどり」の栽培面積は一時 55% ありましたが、製品にならないほど短いイグサで田んぼから収穫出来なかったり、収穫しても価値のある長いイグサが少なく粒が小さいので織るのに手間がかかり労働時間の割に収入が減ってしまい栽培を止める人が増えました。ただブランド化で一部の製品は高価で取引されていました。

しかし 20 年あまりで、「ひのみどり」と正反対の



粒が大きくて伸びがよく収量が多く手間がかからない品種「涼風」が大半を占めるようになり、今ではひのみどりはチラホラ見かける程度になりました。私は 60 歳頃から労働時間

を少なくする為に面積を減らし、畳表販売用に芯のスポンジ部分が多く弾力がある在来種を、イグサの原草販売用に涼風を作ってきました。ありがたい事に最後まで取引を継続することができました。



高齢になり、これからは米の生産販売と自家用の野菜を栽培したいと思っています。米は1970年頃から減反が始まり、記

録的冷夏によってコメ不足が発生した1993年年頃まで強制でしたが、減反が自由になり私は減反を止めたが、今でも政府の給（農機具などの購入資金の補助や飼料米の補助金等）を貰って4割の減反をしている人が大半を占めています。

米はうるち米と餅米を生産し、1枚の田んぼは亡くなられた流域圏学会副会長片野先生の研究会での無農薬無化学肥料で栽培して40年余りになります。無農薬栽培には合鴨、鯉、ジャンボタニシを使う方法がありますが。私は米ぬか農法で栽培しています。

植え付け後草が芽を切る前に米ぬかを10a当たり100^{kg}ほど散布して除草と肥料の効果を利用します。



始めた頃はイグサの刈り取りの合間に手で除草した事もありましたが、今ではほとんど草は生えません。餅米はうるち米と収穫時期が違ってくるのと、台風に強いので栽培していますが、今年からもち米の加工販売に力を入れようと思っています。



米収穫後には食味向上と肥料を減らすため近くの養蜂家から種を分けてもらいレンゲを育てています。

野菜は両親が高齢化した20年ほど前から作り始め今では年間を通して自給する以上に出来すぎるので配るのが多くなります。大半の品種は種から作り余った苗は友人に配ります。白菜、キャベツ、カリフラワー、ブロッコリー、ニンジン。レタス。ゴボウ、青梗菜。

玉ネギ、水菜、なすび には、ネギ、大根、高菜、ジャガイモ、サトイモ、から芋 小豆ニガウリ、豆、オクラ等年間を通じて栽培し冷凍と乾燥で保存します。

毎朝とれる野菜はスーパーで買う野菜と違って新鮮で美味しいと思いますし、地震や台風、水害など自然災害で食料が流通しなくなっても全く困ったことも無いし、保存食がなくても畑に行けば何かあります。

食料自給率が38%の国ですが、農水省は現在の自給だけで2000kcal摂る食事のメニューを書いています。朝ごはん白米1杯、焼き芋2本、糠漬け。昼ごはんは焼き芋2本、蒸かしイモ2本、焼き魚 夕食は白米1杯、粉吹きいも一皿、焼き魚一切れ。

そして2日にうどん1杯とみそ汁1杯。4日に納豆3パック、6日に牛乳1杯。7日に卵1個 9日に肉12g なんと豪勢な食事でしょう！生活習慣病はなくなり、肥満児はいなくなり、食料品店や外食産業は閑散としてしまうでしょう。

農水省は 米の大不作や穀物、大豆などの輸出国が制限をして 2000kcal を下回る場合はイモ類の増産と食料の割り当て配給をし、生産者、事業者には指示命令をだすとしています。

いまの政府は行き当たりばったりの政策で国の衰退を招いていますが、国民の食料さえも危機が来るまでは何の政策もせず放っておくでしょう。沸騰する温暖化や不安定化する国際情勢でいつ食糧危機が起きても不思議で無い時代、自分の食べ物位安心して食べたい



ものです。地元ではイグサが減った分野菜が多く植え付けられるようになりブロッコリーやキャベツが植え

付けられていますが、私たちが作る時は虫に食われ大変な思いをしています、堅い品種と農薬によって綺麗な姿で出荷されています。

同じ農薬でも作物によって使用期限が違ってきます。例えばトレボンという農薬は稲には 14 日前までですがキャベツには 3 日前まで使用できます。MR ジョーカーは稲には 14 日前まで、じゅんさいには前日までとなっています。なぜ作物によって残留期日が違うのか不思議です。農薬の名前は確認できませんが、野菜農家が直前まで散布しているのを見ますとやはり買う気持ちにはなれません。

自分で栽培しているとスーパーの綺麗な野菜が不思議になります。もちろん冬に作った作物は虫の被害がありません。啓蟄と言われる時期までは安心して作りますし、ネギ、春菊レタス、ニラ、茄子、きゅうり、オクラ、ニガウリ等の様に被害が殆ど無いものも多く、ニンジンやイモ類などの根菜類は葉っぱが食われる事はあっても土の中の被害は少ないです。

高度経済成長の後の失われた 30 年。高齢化社会の

後に来るのは急激な人口減少。驚くばかりの国債発行が続いていますが今後どんな社会になるのでしょうか？ソビエト時代の集団農場の時代にも国民は少しばかりの畑が所有されそれで食べ物が確保され生き延びたと言われ、ソビエト崩壊でハイパーインフレがおきて年金でパンしか買えない時も、畑があるので生き延びたと言われました。ロシアは今度のウクライナ紛争でインフレになっても食べ物は畑があるので生き延びると報道されています。

近所に昔の地主の家があります。その 80 代の人



だけが所有になり、うまく作れなかったのか（面積当たりの米の供出があり残りが自家米）食べるのが大変だったと言われ

ました。没収された土地代は 10 年換金できない国債で支払われて、ハイパーインフレが起き紙屑になっています。こんな事が起きないように願っていますが、食べ物さえあれば何とかあります。



令和 6 年度大会のご案内



令和 6 年度大会の日時、開催場所をお知らせします。詳細は後日お知らせしますが、開催場所あさぎり町は人吉市の球磨川上流側にある小さな町です。

旅館も数件しかありませんので、各自
今の早いうちに予約していただければ幸いです。

①現地見学会 日時：6月1日（土曜日） あさぎり町町内

見学予定地：高山、エンブリー資料館、クリケットファーム見学（コオロギ食）、あさぎり町資料室、尾鷹林業（木炭生産・木酢液製造見学）、（株）アスリー（もたぎ茸栽培見学）等

②総会 日時：6月2日（日曜日） 時間：午前 10 時

会場：あさぎり町公民館せきれい館（中会議室）

住所：あさぎり町深田西 9 5 5 - 1、電話：0966-45-0665

③研究発表会

日時：6月2日（日曜日） 時間：ポスター発表 12：00、口頭発表 13：00

会場：あさぎり町公民館せきれい館（講堂）

※懇親会は、1 日目（6 月 1 日）の現地見学会終了後、あさぎり町で予定しています。

※あさぎり町宿泊宿・ホテル

・志らき旅館 10 室（3 人部屋× 10）	電話：0966-45-0061
・ビジネスホテル肥前屋	電話：0966-45-0055
・ビジネスホテルかどや（7 部屋）	電話：0966-45-0049
・あさぎり山荘ひばり	電話：0966-43-1055
・簡易宿泊施設ブルートレインたらぎ	電話：0966-42-1120